

I まえがき

「ベトナム漢喃研究院・国家図書館所蔵家譜目録」（以下「家譜目録」と略す）は、ベトナム漢喃研究院（Viện nghiên cứu Hán nôm）と国家図書館（Thư viện Quốc gia Việt Nam）が所蔵する家譜の目録である。筆者は、2023 年 3 月から 2024 年 3 月までの約 1 年間にわたり、両研究機関において所蔵家譜の実見調査（複写本および一部原本を含む）を行い、調査票を作成した。「家譜目録」は、この調査票に基づいて筆者が作成したものである。本稿では、「家譜目録」の解題およびその一覧を提示する。

「家譜目録」は、漢喃研究院の元研究員グエン・ティ・オワイン（Nguyễn Thị Oanh）による「漢喃研究院所蔵的譜牒」に基づいている〔中西 2004: 39-47〕。グエン・ティ・オワインによれば、「漢喃研究院所蔵的譜牒」は 2001 年に上海師範大学で開催された国際シンポジウムで発表したものである。「漢喃研究院所蔵的譜牒」の末尾には、「この図表は『越南漢喃遺産：書目提要』に依拠して作成された（此表格拠『越南漢喃遺産：書目提要』而立）」と中国語で記されている。『越南漢喃遺産：書目提要』とは、1993 年に漢喃研究院から刊行された *Di sản Hán nôm Việt Nam : thư mục đề yếu*（全 3 巻）を指し、本稿ではこれを『漢喃遺産』と略す〔Trần Nghĩa, François Gros 1993〕。

筆者は、修士論文『19 世紀前半ベトナムの家譜史料の研究—段族のゾンホ形成過程を中心に』において、嘉隆・明命年間（1802-1840）に編纂されたと推定される家譜約 20 件¹を分析した〔趙浩衍 2020〕。その際、「漢喃研究院所蔵的譜牒」を参考資料として活用するとともに、国家図書館所蔵の家譜を補足し、「ベトナム家譜史料の目録」を作成した。さらに、博士課程進学後、筆者はこの目録に基づいて現地史料を実見調査し、『漢喃遺産』の修正を試みた。

しかし、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によりベトナムへの渡航ができなくなったため、代替措置として韓国学界に日本学界の家譜研究の動向および嘉隆・明命年間に編纂された家譜の特徴を紹介した。その際に、「〈資料 1〉ベトナム家譜史料の目録」を「〈자료 1〉 베트남 자과 사료 목록」として公開した〔조호연 2021〕。

コロナ禍後の 2023 年に現地調査を再開し²、その成果を広島史学研究会 2024 年度研究大

¹ 2018 年と 2019 年の夏季休暇に漢喃研究院を訪問して閲覧した資料である。特に 2018 年の調査は、筆者にとって初めての現地調査であったが、大阪大学東洋史学研究室の先輩である吉川和希さん（現・関西大学准教授）に、研究院との連絡の取り方や閲覧許可の申請方法、調査の進め方など、実務的な知識を惜しみなく共有していただき、大いに助けられた。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

² 筆者はハノイ国家大学ベトナム学開発科学院（Viện Việt Nam học và Khoa học phát triển）の受入の下で現地調査を実施した。調査に必要なビザや紹介状の取得をはじめとする各手続きについては、ドー・ヴァン・キエン（Đỗ Văn Kiên）氏より多大なご助力を賜った。また、漢喃研究院図書室での資料閲覧に際しては、グエン・トゥアン・クオン（Nguyễn Tuấn Cường）院長、ヴォン・ティ・フォン（Vương Thị Hương）副院長及び、図書室の研究員の方々から快いご支援をいただいた。皆様のご協力とご支援に、深く感謝申し上げます。

会（10月27日、広島大学）及び、日本ベトナム研究者会の研究大会（11月9日、京都産業大学）にて発表した。さらに、2024年度に提出した博士論文『近世ベトナム家譜研究』に「家譜目録」の解題と一覧を収録した〔趙浩衍 2025〕。

一方で、2023年6月からは京都大学東南アジア地域研究研究所の共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点（Global Collaborative Research, GCR）」における研究課題「『東南アジア型発展径路』概念の深化に向けた FieldNote Archive の可能性：インドネシア・南スラウェシを事例として」（研究代表者：大橋厚子）の共同研究員として活動を開始した。この活動の一環として、GCR Working Paper Series 刊行補助の機会を得たことで、今回本目録を一つのまとまった形で刊行することが実現した³。以上が、「家譜目録」の作成から刊行に至るまでの経緯である。

次に、本目録の作成・整理手順について簡単に説明しておきたい。「家譜目録」の作成にあたり、筆者はまず先行研究において指摘されたベトナム家譜の特徴を整理し〔多賀 1960〕〔山本 1961〕〔Nguyễn Đức Dụ 1992〕〔末成 1995〕〔八尾 2009〕、それを基に「ベトナム家譜調査シート」を作成した〔図 1〕。

調査票の裏面は白紙にし、そこに成書年代や、作者の推定に役立つ家系図や生没年を記録した〔図 2〕。さらに家譜の中に、儒学者としての活動（風水、漢字教育、医学）や女性の権利・活動といった筆者の関心事項があった場合は、該当箇所を別途抄写し、可能な限り詳細に記録した。

その後、調査票の内容を基に、エクセルに成書年代、地域（省・県・社）、階層、世代表示タイプなどのデータを入力した。またこれに並行して、手書きの家系図もエクセルを用いてデジタル化した〔図 3〕。特に成書年代については、『漢喃遺産』及び、その中国語翻訳版である『越南漢喃文献目録提要』（以下『漢喃文献』と略す）⁴に多くの誤りや記載の省略が散見されたため、それらを修正して補足的な解説を加えた。本稿の「II 「ベトナム漢喃研究院・国家図書館所蔵家譜目録」解題」では、主に成書年代に関する内容を中心に解説している。

最後に、筆者は「家譜」を「①一族の末裔を名乗る者（外孫も含む）が、②一族共通の始祖から子孫へのつながりを明らかにするために、③祖先の家系（父母・兄弟・配偶者・子孫）、経歴、逸話、忌日及び墳墓などの情報を漢喃（Hán Nôm）⁵で記したもの」と定義し

³ 本提案をくださったのは、京都大学東南アジア地域研究研究所の大野美紀子氏である。また、本目録を GCR のワーキングペーパーとして刊行することを快く承諾してくださった研究代表者の大橋厚子氏と、申請手続きにご助力いただいた柳澤雅之氏にも、心から感謝申し上げます。

⁴ 『漢喃文献』は、『漢喃遺産』の内容を翻訳・補足するとともに、資料を「経・史・子・集」の四部に分類したカタログである。「史部」の中に伝記という項目があり、「総伝」「別伝」「神跡」「譜牒」「日記」という五つに区分されている。この内「譜牒」では、『漢喃文献』の通し番号 1098 から 1362 に該当する、265 種類の史料が紹介されている〔劉春銀, 王小眉, 陳義 2002〕。

⁵ 主に漢文で作成され、一部に字喃を含むものに限定して取り扱った。

た。その結果、332 件の内、(1) 上記の定義上、家譜に該当しないもの (26 件) が含まれていることが確認された。これらは「譜」というタイトルを持ちながらも、実際には祖先の文集や祭文、家規などに分類されるものである。(2) 系譜資料の一種である個人の行状や伝記、科举合格者名簿である登科録 (11 件) も、始祖からの系譜を記したものではないため取り除いた。さらに、(3) 字喃のみで書かれた家譜 (3 件)、(4) 閲覧できなかったもの (21 件)、(5) 同じ写本が存在するもの (33 件) も考察対象から外した。その結果、所蔵史料 332 件の内、「家譜」に該当すると判断した 238 件と、それ以外の 94 件を分類した。これらの一覧は、本稿の「III 「ベトナム漢喃研究院・国家図書館所蔵家譜目録」一覧」に収録されている⁶。

本目録における家譜の定義や分類、成書年代の推定については、異論が生じ得ることは認識している。また、21 件の家譜がなお閲覧できていないことも大きな問題である。そうであるにも関わらず、敢えて本目録をワーキングペーパーとして刊行した理由について、以下に説明したい。

第一に、現在に至るまで、ベトナム国内外において漢喃研究院をはじめとする研究機関や文書館に所蔵される家譜を体系的にまとめた目録が存在していない点である。これは家譜の定義の問題と深く関係しており、漢喃研究院においてさえ、所蔵家譜の総数について議論の基盤となるべき基本的な共通見解すら無いのが現状である [Phạm Thị Thùy Vinh 2019] [マイ・トゥー・クイン 2024]。そのため、議論の基盤となる目録および解題の作成が長らく行われてこなかった。隗より始めよの言葉どおり、筆者の定義や分類方法に異論が提起されることで、今後議論が活発化することを期待したい。

第二に、本目録の作成は、長年にわたる漢喃研究の蓄積と、それを支えてきた研究環境の賜物である。筆者が本目録を限定的ながらも完成させることができたのは、『漢喃遺産』や『漢喃文献』などの先学の研究成果があったからであり、また漢喃研究院の協力によって 1 年間ほぼ自由に資料を閲覧できる環境を得ることができたからに他ならない。なによりも、外国語に堪能であり漢喃資料について議論できる研究者が図書室にいたことが大きな助けとなった。このような充実した研究環境は、漢喃研究院が 1970 年に社会科学翰林院の前身である社会科学委員会 (Ủy ban Khoa học Xã hội) 内に漢喃班 (Ban Hán Nôm) として設立され、1979 年に研究院として独立して以来 [Nguyễn Tuấn Cường 2017: 4-5]、ほぼ半世紀にわたり、東アジア共通の素養である「漢文」とベトナム独自の「字喃」を組み合わせた「漢喃」研究を推進してきた最大の成果の一つであると言って過言ではない。このような漢喃研究院の協力と支援による研究成果として、筆者は本ワーキングペーパーの刊行を決断した。

したがって、本目録の刊行は、家譜研究の議論を深化させる基盤を提供するとともに、これらの資料を体系化し、研究者間で共有するための重要な第一歩であると考えている。また同時に、漢喃研究院の活動がもたらした一つの研究成果であることも強調しておきたい。

「家譜目録」が今後、家譜研究およびベトナム漢喃資料全般の研究に寄与するとともに、学際的な協力を促進する一助となることを願う。

⁶ 具体的な事例分析及び、それに基づくデータ解析については、別稿を準備している。